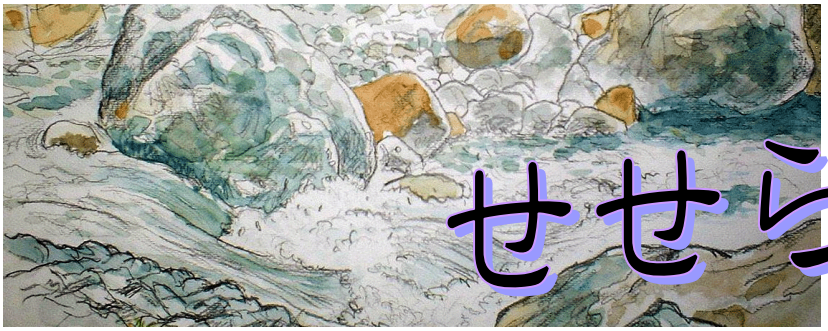
Vol.53 平成３１年３月７日（木）
検索　金目川　http://www.asahigs.co.jp/kaname-net/index.html　　編　集・発　行
金目川水系流域ネットワーク
世話人会



せせらぎ通信

夢　未来　創造

秦野市　浅見一義

２月のたんぼ

二月末、秦野では水田の耕耘が行われ始めます、春近しです。いつの間にか、小鳥が集まり、虫を食べていました。

平成二十二年の四月よりキヌヒカリを育む会の皆さんが田植えから草刈り、収穫まで、ご飯にして食べるまでを体験しました。その体験のなかでビックリしたのは、子どもたちの素晴らしい、観察力と創造力です。大人ではとても発想できない、このような子どもたちがいれば日本の未来は明るいと確信しました。

身近な体験を育んで、日本、世界へ視野を広げ、やがて、世界から日本を発想して、豊かな未来を創造する力を養ってほしい。そして日本の食料の歴史と技術を守り、次世代に伝えていく大切な使命を担ってほしいと思います。

稲には二種類、水田で栽培する苗代には水稲、畑地で直まきするには陸稲を使用します。

水稲は中国大陸の中央部、長江中流域で、陸稲は東部の長江下流域で栽培が始まりとなります。日本では、今から二千年ぐらい前、弥生時代に稲作が始まったとされていますが、最近になって、縄文末期の岡山県総社市の土器の中から陸稲の化石が発見されたため、約三千五百年前には、すでに陸稲による稲作が行われていたことがわかりました。

また、六千年前の岡山県図山市の貝塚地層から、水稲の化石が発見され、縄文時代には水稲栽培も行われていたようです。

日本では朝鮮半島より早くから稲作が行われていた可能性もあります。現在、稲作は北緯五〇度から南緯三十五度の広い範囲で行われていますが、米の九十％はアジアで生産されています。九州から始まり北へ北へと広がり、日本の稲作は、明治時代から北海道でも行われるようになりました。収穫後の米から、米、餅米、ぬか、籾殻、わらなど、稲のほとんどの部分が利用されます。無駄なところはありません。古代から現代に至るまで稲作は私たちの食生活と切り離せない大切なものです。

湘南の豊かな自然や文化を育んできた、金目川水系流域について一緒に考えたい。学んだり、親しんだりするために、市民の方、事業者行政とで金目川水系流域ネットワークを作りました。

７月の水田　稲

会員は日頃の活動や流域にたいする意見情報などお寄せいただき、ネットワークから会報などの形で情報を発信しています。

表丹沢、大山に降った雨は、金目川、水無川、鈴川などに集まり、合流して花水川となって相模湾に注いでいます。これを、金目川水系と呼んでいます。

８月の稲

流域面積は一千八百キロ平米で伊豆大島の二倍ほどとなっています。

扇状地である秦野盆地では、一部、地下を流れ、湧水となって再び地上に出てきます。その先の相模平野の水田地帯では、昔から、農業用水として重要な働きをしてきました。河口近くでは、流れが、たびたび変化したため、平塚市と大磯町の境界は大変入りくんだ形をしています。

2018年金目川の鮎概況

永尾貴一

現在、金目川では鮎が増加しつつあります。10年前のどぶ臭く、水が汚れていて、川に近づく気にもなれなかった状況とは全く異なります。

これは、環境保全に関心の深い市民の方々の多大なるご協力と、行政のご尽力によるものと感謝いたします。

ただし、残念ながら、現在のレベルでは古老たちから聞いた**60年以上前の金目川の状況**（**後述**）には及ぶべくもありませんが。

一度、破壊された自然、汚染された自然を元の状態に戻すには膨大な労力、お金、時間がかかります、子孫に汚染のない豊かな土壌の田畑森林、川、すなわち生活排水、農薬、毒劇物で汚染されていない綺麗な地球環境を残しましょう。

今日、魚、鳥、水生生物に降りかかる不幸は、明日は人類に降りかかる不幸の予告でもあります。

調査地点（主な調査地点）

金目川本流：

中流域　落合橋～飯島の堰）

支流　　：

室川、座禅川、三笠川、大根川

善波川、鈴川、坂戸川、河内川

調査方法

投網による捕獲、写真撮影、河川の現場での鮎の目視確認、ただし、60年以上前の金目川に関する鮎の情報は古老たちからの聞き取りによる。

調査日ごとの報告書は添付しておりません。ご要請があればメール致します。

2018年の金目川の水況：

3月～6月にかけて雨量が適当にあり、時々、大雨も降った。

毎年、田に水が必要な5月～9月に、その下流2～3㎞が干上がる**魚道が無い飯島の堰**を大雨の時に超える事が出来た鮎など。彼ら、遡上魚が例年より多かったと推定される。

それを証明するかの様に、鮎の解禁日6月1日から7月末頃までは鮎は例年より多かった。

ただし、8月以降は例年並みになった。原因は不明だが、網師、釣り師の場合は例年と同じであった。

また、6月は金目川にアオサギ、しらさぎが少なかった。

特記事項 鮎：

今年の**夏の高水温**の為に、鮎が湧水のある場所に移動する状況があった。遡上の上限地点が本流、および鈴川と、従来の認識より上流であった。落ち鮎の時期の遅れ、2018年に限った事ではないが、10月になっても鮎が中流域に多数存在する。板戸川他の水温が50～60年前より高いためか？

善波川の出口橋～矢茂橋間で2018年6月8日に、鮎の魚が大量に死んだ。

岸を散歩されていた市民が伊勢原市役所に通報。死んだ魚を県で分析したが原因は不明。この場所の上流には工場は無い。また、生活排水の流入も少ない。

2018年1月以降は河川工事、橋梁、護岸道路工事もしていないので、工事に使用するセメントのアルカリ毒が死因でもない。

2017年は2018年より渇水が酷かったがこの区間で生きた鮎が捕獲されている、

従って、渇水による酸欠死でもない。

鮎以外の特記事項：

アユカケが本流で増加。絶滅危惧種**なまず**は近年、減少していたが座禅川、鈴川、本流でみられた。

本流では**鯉**は相変わらず多いが、以前は捕獲できた鮒は今年も皆無だった。これは川の流れを直線化した影響かもしれない。ただし、支流の鈴川には存在する。

モクズ蟹の遡上が少なかった。

鰻がすこし戻ってきた。

今年、中流域でも鰻を釣っている人を2人みかけた。2017年は皆無。

ただし、投網にウナギがかかる事は今年も無かった。

鰻が多い川ではウナギが時々、昼間でもかかる。

鰻が多い川では夜間の投網には鰻が頻繁にかかるが、金目川では夜間の投網は禁止。**川エビ**の増加。

増加。観察会での捕獲、また本流で川エビ専門に釣っている人を見かけた。

生物多様性への取り組み

平塚市と**生物多様性推進協議会**が協働して、二〇一〇年生物多様性条約の課題とされた、**締約国は自国の生物の絶滅の速度を遅らせる**ために、どの種がどれだけ存在をしているかを、**的確かつ確実な調査**を始めています。

私たち、**金目川水系流域ネットワーク**も協議会の一員として豊かな生物多様性を求めて地味な調査ですが、一歩一歩を前に活動を進めています。

調査の定点である土屋、吉沢の自然、金目川中流、相模川流域、総合公園、水田、海岸地帯、湘南平等を実査しました。

2019年から3年間、特に水辺の生物多様性の現状を調査して、正しい種の現状を解明いたします。

きれいな川に生息する鮎について、50年前の正しい調査資料がないのは残念ですが、しっかりと現状を記録に残していきます。

同じように**アユカケ**の古い資料は現存していませんが、今回の調査でしっかりと作成いたします。

また、総合公園の自然のままの池に**ヨシガモ**を実査で見たときは驚きでした。

「湘南里川づくり」取組みのご紹介

丹沢大山を源流に湘南地域を流れ、相模湾に注ぐ金目川（かなめがわ）水系。

“湘南里川（さとかわ）づくり”とは、湘南地域のふるさとの川である金目川水系の河川等を地域の貴重な財産として次世代を担う子どもたちに引き継いでいくため、市民（湘南里川見守り隊）と行政の協働により清掃、草刈、植栽、生き物観察会など河川等の保全・活用に取り組む活動のことです。

この「湘南里川づくり」を流域全体に広げていくため、市民と行政とが連携し、設立された「湘南里川づくりみんなの会」。

「湘南里川づくりみんなの会」では、現在、「湘南里川見守り隊」の会員を募集中です。

みんなで、活動情報を交換したり、金目川水系の理想像について語り合いませんか？

ぜひ、ご参加ください！

写真は平成 29 年度の「秦野市市民の日」に出展し、会の活動を PR した際の様子です。

湘南里川づくりに一緒に取り組む「湘南里川見守り隊」を募集しています。詳細は、ホームページで！

里川づくり　検索

問合せ先

湘南里川づくりみんなの会事務局
神奈川県湘南地域県政総合センター企画調整課
電話　（0463）22-2711（内線 2111～3）
ホームページアドレ http://www.satokawa.com/